

長野県内における子供服の洋装への移行

The changes from children's clothes dressed in Kimono
to those dressed in Western style in children at Nagano Prefecture

佐藤 雅子 Masako Sato^{*1}
中山 竹美 Takemi Nakayama^{*2}
林 千穂 Chiho Hayashi

Abstract : The purpose of this study was to investigate the changes to the Western style from Japanese style in the children's clothes in Nagano Prefecture. The cause of wearing the Western style clothes in children in Nagano Prefecture was guessed by the documents that the schoolchild, being dressed in Western style, came out to greet Emperor Meiji in Ueda-shi, Nagano in 1878. The start of spread of Western children's clothes was guessed when the factory of a ready-made was built by Tokyo Akasaka in 1912. After that, it seemed that the Western children's clothes were spread from Tokyo to the whole country. We found the finishing-kindergarten photograph in Nagano-shi from 1920 and the photograph of a child wearing the Western style dress in Suzaka-shi. It is common that these children had many opportunities for their parents to go to Tokyo. It seemed that the children wearing the Western style dress at the time were still restricted. Transition of the Western style dress of ordinary children in Nagano Prefecture, was guessed from the graduation photograph in three elementary schools since 1926. We found that wearing the Western style dress was earlier in boys than girls, and also in city than suburb. In 1947 the Western style dress wearer became 100% also at the elementary school of the suburbs in boys and girls. However, these findings were on a graduation album, and it is considered to be later that the Western style dress becomes natural by the usual life of children.

Keywords : children's clothes, Western style, changes

1. 目的

現在、洋服は私達の様々な生活の中に溶け込み、洋服を着用することが当たり前となっている。しかし当たり前のように着用している洋服は、明治以後になってから外国から入った洋装スタイルを基にして、時代の流れの中で改良され今日に至ったものである。明治期以前の日本ではほとんどの庶民が和装であった。

和装から洋装への変換期における人々の服装の移り変わりは、どのようであったのか、成人の服装の変遷については、既に多くの研究報告があるものの¹⁾~³⁾、子供の服装の変遷についての研究はほとんど見当たらない。

岡村⁴⁾は、子供服の普及は昭和10年頃(1935)からであり、その頃には学校での子供は洋服が主で、和服が珍しくなったことを記している。地方の子供達の服装についても同じ事が言えるのかどうか興味のあるところである。

現在のような交通や情報網が発達していなかった明治の初期には、都会から離れた地方では、まだ江戸時代の影響が衣生活に強く残っていたと考えられる。長野県内の当時の子供達は、子供服として外国から入ってきたものを、そのまま着用していたのだろうか。また男児と女児の洋服では、着用し始めた時期に違いがあったのだろうかなどについての疑問を解くため、資料等を中心に調査を行った。

2. 研究方法

2-1. 資料調査

長野県内における子供服の洋装化の時期については、服装史に関する著書や写真などを中心に調査した。また、昭和元年(1926)以降の小学校については、長野市山王小学校⁵⁾と、七二会小学校⁶⁾、および塩尻市片丘小学校⁷⁾の卒業アルバムをもとにした。幼児については長野市の『旭幼稚園百年の歩み』⁸⁾を参考とした。

今回、小学校の服装資料について、山王小学校、七二会小学校、および片丘小学校を対象にした理由は、昭和元年から毎年の卒業写真が全て揃っていた事による。

なお本論文では子供服着用の対象年齢は、JISL01031 により小学生以下幼児までとした。

2-2. 聞き取り調査

大正から昭和初期生まれの人で、洋服を早くから着用し、当時の記憶が鮮明に残っていると判断できる人達から聞き取り調査を行った。

3. 結果および考察

3-1. 資料による調査の結果

長野県内で初めて洋服が公的な場所で着用されたのは、明治11年(1878)の明治天皇の来県に際し、上田市海野町出身の荻野憲治が、出迎えの服装として小学校生徒のために洋服を作り、それを着用させたのが最初と考えられる¹⁾。以下はその記述部分を抜粋したものである。

「明治5年先輩桜井のすすめで洋服調製技術の修行を決心したのは24才で、その当時の洋服仕立て職人がよくやったように、最初横浜に行き外人の古服を買い求めて解きほぐし型取りを研究したようである。同7年12月に東京麹町三番町に洋服屋を開業したが、母の希望で帰郷。地方における開拓者として活躍した。それでもまだ田舎には余り仕事がなく、洋服着用者は医者、官員、先生、実業家らに限られ、下衣、のれん、足袋、股引き、洋傘となんでも縫い上げる仕立屋をせざるを得なかった。ただ明治11年9月明治天皇の北陸路御巡幸のみぎり、お出迎え注意の中に『洋服羽織袴勝手の事』という条項があって、松平学校と称する上田藩の藩校の流れをくむ小学校の生徒達がカンレイシャの洋服・帽子・短靴姿で、また引率した先生達はフロックコートで

出迎えたが、その殆どは荻野の手で仕立てられたものであった。」

明治10年代の長野県内における子供達の洋服についての資料は、上記の資料以外は見当たらなかった。明治30年代になると日清戦争の時、兵士送迎のため少年音楽隊がセーラー服上下を着用した記録と写真がある⁹⁾。

当時、兵士送迎には村をあげて歓迎に参加しなければならなかった。送迎のために教育の時間を費やしたため、教育に少なからぬ支障をきたしたことから、後に送迎を中止したり、高学年だけに限定する学校もあったようである。学校全体の歓迎行事は、少年たちの心に軍服姿に対してのあこがれと敬意を抱かせ、子供達は次第に軍国熱にとりつかれていったことが記されている⁹⁾。

長野県内で洋服を初めて着用した子供は、上述のようにごく限られていたことが推測される。その後、時代の進展とともに洋服は、一般の子供達へと普及したと考えられるが、普及のためには既製服化による大量生産が必要である。子供服が既製服として製造されていく経過については以下のような記録がある。

『日本婦人洋装史』²⁾から子供服に関する記述部分を要約すると、「生活改善同盟会は『児童服に関する



写真1 日清戦争時の兵士送迎のための少年音楽隊
引用文献9)より引用

事項』により、なるべく速やかに洋装に改める方針を大正12年(1923)に出した。同会推奨の児童服を提示し、裁ち方の図解も掲げた。しかし業界より早く明治43年(1910)には、銀座の輸入洋品商関口源太郎は、舶来の男女子供服を解いたものを見本として洋裁師山村久吉に、大中小の子供服を作る事を依頼し、出来上がった子供服は、東京の三越白木屋百貨店に納入され、この時期より子供服の販売が始まった。その後山村は、大正元年(1912)に赤坂に工場を建設して既製服を製造し始めた。山村の弟子の木村は、大正8年に独立し子供既製服業を開いた。この年には多くの既製服製造業者が、婦人服から子供服の製造業に転じた。」

以上のことから子供服は大正時代に、既製服化され、需要も伸びたことが推測される。

そのような中で、長野県須坂市の田中本家博物館には、大正7年頃(1918)からの子供服が、600点余り保存されている。また当時、三越白木屋呉服店から発刊されていた洋服に関する冊子が56冊現存しており、今でいうところの通信販売に相当するものと考えられる。それらは白黒印刷であったため、品物の一点づつに色や柄、模様などの説明が詳細に記されており、注文書と振り込み用紙が同封されている。地方に住む人達は、このような方法で、東京で売られていた子供服を地方でも手に入れる事ができたと考えられる。写真2は、大正7年(1918)生まれの千よふさんが、2、3歳頃着用したワンピース姿である。このワンピースは現在、田中本家博物館に保存されている、

これらの服の生地としては、麻や毛織物および木綿などが用いられ、現代でも着られるようなモダンな服もあり、新品同様の姿で保存されている。

大正時代はまだ、地方では経済力がないと洋服は着ることができなかったと推測される。実際、田中本家の子供達も普段着として着用することは少なかったようである¹⁰⁾。

長野県の場合、子供服は東京に出向く機会が多い

経済的に豊かな人達から一般の人達へと普及していった事が推測される。子供が着たいというより、むしろ親の願いから東京の三越などで購入したようである。当時の洋服は一般庶民にはとても高価で買えなかったと考えられる。

図1は、昭和元年(1926)以降の山王小学校、七二会小学校、および片丘小学校の卒業写真を基に男女別の洋服の着用者を著者が数えて作成した、洋服の着用率の推移を示したものである。

都市部である山王小学校は、男子も女子も他の2校より早い時期から洋服が着用されている。男子は昭和7年には洋服着用率が100%になっており、その後、昭和13年には男女とも100%になっている。これに対し、長野市郊外の七二会小学校と塩尻市郊外の片丘小学校は、男子は両小学校共に昭和11年から100%になっているが、女子の洋服着用率はかなり低い。また、塩尻市郊外の片丘小学校の方が、長野市に近い七二会小学校の方より、洋服着用率の時期は遅いことが分る。男女が両小学校で100%になるのは、それぞれ戦後の昭和21年と昭和22年からであり、都市部の小学校に比べかなり遅れている。

昭和元年における、東京の余丁町尋常小学校の卒業写真(全員男子)¹¹⁾では、洋服の着用率は55%であり、長野市内の山王小学校の男子が65%であることから、東京以外の地方でも都市部は、かなり子供



写真2 女児用ワンピースを着た子供時代の田中千よふ氏
引用文献10)より引用

の洋装化が進んでいたことが伺われる。

また、男子の方が女子よりも洋装化が急激に進んでいった背景には、当時の日本社会の軍国主義化も理由の一つと考えられる。

戦時下の昭和17年(1942)のアルバムには、洋服の子供と着物に袴をはいた子供の両方が写っている。ところが、戦争が激しくなった時期の昭和18、19年のアルバムでは、教師は国民服を着用し、男子生徒

は学生服であるのに対し、女子生徒は上衣に筒袖着物、セーター、ブラウス、セーラー服等様々な服装を着用しており、下衣にはモンペ姿が多い。

服装が社会状況と深く結びついていることが分る。物資が乏しく着る物にも事欠いた戦時下に、戦争という非常事態を通して活動をし易い洋服が人々の間に広がっていったことは想像に難くない。特に学校での体育の授業に洋服が取り入れられた事が、一般の子供達への洋装化をさらに早めたと考えられる。

小学生より年齢の小さい子供については、長野市県町の旭幼稚園の卒園アルバムを基に洋服の着用者を数え、着用率の推移を図2に示した。

この幼稚園ではいち早く、須坂市の「田中本家」の子供達とほぼ同じ時代に、卒園児が洋服を着用していたことが分る。この幼稚園児は、経済的に恵まれた家庭の子供達であったようである。親の職業等から、特に都会との交流が盛んであった事と、この園の園長が外国人女性であった事などの特殊事情が洋服の着用を一層早めたと考えられる。大正末期の卒園写真では、男女53名中、男子は100%が洋服であり、また女子も91%が洋服であった。

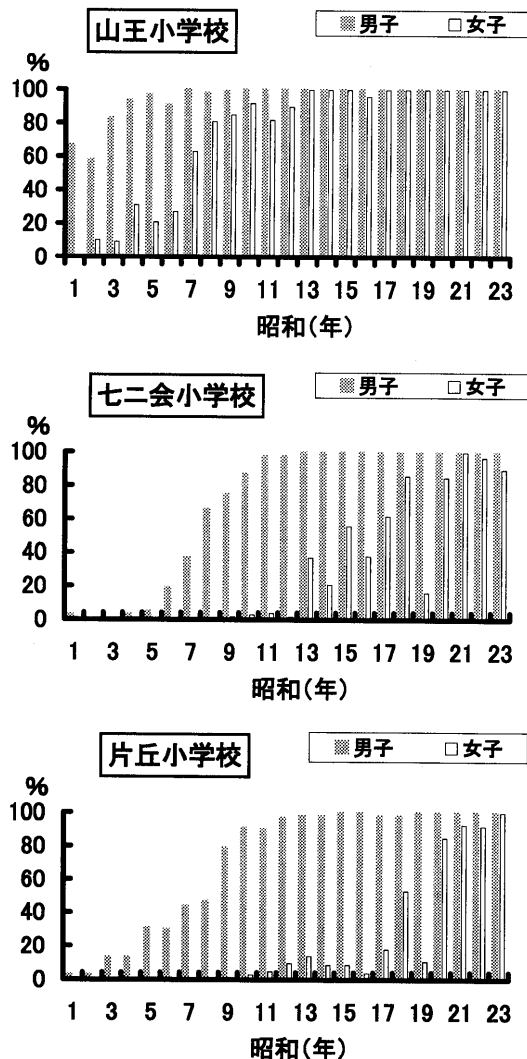


図1 小学校の卒業式における洋服着用率
引用文献5)～7)より著者作成

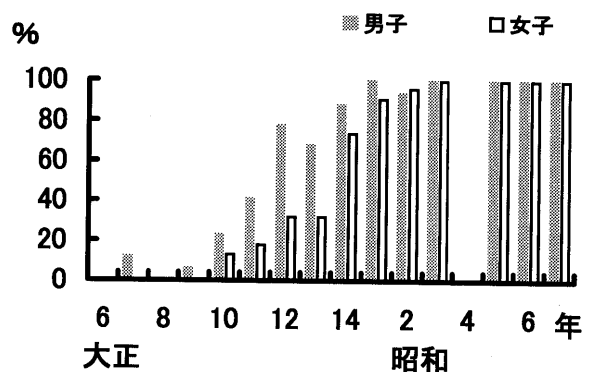


図2 卒園児の洋服着用率
引用文献8)より著者作成
注) 昭和4年が欠けているのは資料欠落による

3-2. 聞き取り調査の結果

大正12～昭和2年（1923～1927）生まれで、現在も元気で生活している女性4名から、子供の頃の洋服に関する聞き取りを行った。

①長野市のNさん（大正12年生）

父親が洋服に関心があり、小学校4年生の時、町の洋品店で父が買ってくれた。洋服を着ていた女の子はクラスで2人だけで、洋服を着ていると男の子にいじめられて嫌だった。6年生の卒業式も洋服で出席した。長野の冬は寒いので、クラスの半分の生徒は柄のあるネルをかぶっていた。現在のストールのような感じである。

②長野市のTさん（昭和元年生）

小学校1年生の時は着物で入学した。カバンは布の手作りカバンで、ランドセルはクラスに1人しかいなかった。父親の知人が長野市柳原で洋品店「しみずや」を営んでいたのので、そこで洋服を買ってもらった。小学校3年生から洋服を学校に着ていった。都会から転校して来た女の子は私達の洋服とは違い可愛い形のおしゃれな洋服だった。

③塩尻市Mさん（昭和2年生）

小学校6年生の修学旅行の時は、サージの布でセーラー服を姉に作ってもらった。姉は当時洋裁の先生から作り方を教わっていた。手縫いであった。クラスで女の子は数人しか洋服を着て行かなかった。卒業式は着物で出席した。

④東京都Sさん（昭和元年生）

東京で生まれ育ち、幼児の時から洋服であり小学校の時も洋服で過ごした。周囲の友達も洋服であった。戦争中4歳下の妹（昭和4年生）が疎開した長野県川上村では、まだ着物を着ていた。ランドセルの子供もいなくて洋服を着ていると男の子にいろいろと言われ、母親に着物を作ってもらい、それを着て学校に通った。履物もわらじの子供がいて都会から来た子供は大変な驚きであった。

以上の聞き取り調査から、ほぼ同じ年代に長野県内で生まれても、長野市と塩尻市では小学生時代の

洋服着用状況が異なり、塩尻市の方が長野市より洋装への移行が遅かったことが伺われる。また、東京と地方ではさらに洋服の着用時期には大きな差があることが分った。今回は女性のみしか調査しなかったが、今後男性についても調べる必要がある。

4. まとめ

衣服のほとんどが和服であった状態から、明治になり突如洋服という異質な被服文化に接した人々が、それをいつ頃からどのようにして受け入れていったのか、長野県内の子供服の洋装化について調査した。

その結果、長野県内で、子供の洋装がまだ珍しかった時代は、東京に何らかの関係があり経済的なゆとりや、洋服への関心をもった大人（親）が明治末期から大正時代に、東京（三越等）から子供服を取り寄せていたことが分った。

また、明治11年（1878）に明治天皇を小学生が洋服を着て出迎えたという記録から、子供達もその頃から徐々に洋服の文化に触れていったと考えられる。また、戦争という非常事態の中で、活動し易かった洋服は、戦争を契機にさらに普及を早めていったことが推測される。

岡村⁴⁾は、子供服について昭和10年頃（1935）には、都会はもちろん全国的に普及したとしているが、地方については今回調査対象とした小学校の卒業アルバムから、男女共にほぼ全員が洋服を着用したのは、昭和23年（1948）の戦争終結の3年後頃であったということが分った。しかしこれはアルバムの卒業写真から言える事で、子供達の普段の生活の中での洋装が当たり前になるのは、地域によって異なるが、さらに後になったと考えられる。

今回の資料は、限られた地域の小学校を対象としたが、今後、現存する資料を探して、長野県内における洋装の変遷について、さらに調査を継続していきたい。

なお、本文は平成12年度、生活科学特殊研究において研究したものである。

本研究を行うにあたり、ご指導ご協力を賜りました、長野県立歴史館総合情報課課長後藤芳孝氏、長野市誌編纂室古沢友三郎氏、本学学長上條宏之先生、教養学科教授横山憲長先生に、感謝の意を表します。また、聞き取り調査にご協力頂きました、本学卒業生に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 日本洋服史刊行委員会：『日本洋服史』，日本洋服史刊行委員会，荻野憲治の洋服，日本服装史，p.169（1977）
- 2) 中山千代：『日本婦人洋装史』，吉川弘文館（1987）
- 3) 遠藤武、石山彰：『写真にみる日本洋装史』，文化出版局（1980）
- 4) 岡村節子：『日本の子ども服物語』，株式会社チャネラー（2003）
- 5) 長野市教育委員会文化課長野市誌編纂室：『目で見る山王小学校のあゆみ』，長野市（1993）
- 6) 長野市教育委員会文化課長野市誌編纂室：『目で見る七二会小学校のあゆみ』，長野市（1988）
- 7) 片丘学校沿革史刊行会：『片丘学校沿革史』，片丘学校沿革史刊行会（1986）
- 8) 長野市教育委員会文化課長野市誌編纂室：『旭幼稚園百年の歩み』，日本基督教団（1998）
- 9) 長野県児童文化史研究会：『子供時代』，長野県児童文化史研究会（1980）
- 10) 田中本家博物館：『子供のおしゃれ』，田中本家博物館（2000）
- 11) 家永三郎：『日本人の洋服観の変遷』，ドメス出版（1976）